
臨床社会学の方法

(28) 男性同士の関係性 -男どうしの親密さと脱暴力-

中村 正 (立命館大学)

1. ホモソーシャルなもの

男性同士の関係性はホモソーシャルなものとして把握されている。同性同士の関係を把握するための概念であるが、男性同士に用いられることが多い。DVや虐待をはじめとして暴力は、男性から女性や子どもへの暴力を念頭において論じられることが多いが、家庭以外の暴力も含めると男性同士の暴力の被害と加害が多いこともホモソーシャルなもの論から導くことができる。もちろん暴力を誘発する背景になるというだけではなく「男どうしの絆」という意味で用いられることが一般的である。暴力と絆は男性性において相性良く結びつく。ブラザーフッドという言葉もあり、男性同士の社会関係を把握する社会的な概念である。義兄弟のような言い方で用いられると「組織構成員」という感覚もある言葉だ。

ホモソーシャルなものは、ホモセクシャル、ホモエロス、ホモフォビアと同じような領域にある言葉。それらは同じように男性だけではなく女性同士にも用いられるが、ジェンダー研究では女性と男性の非対称があり、他の現象と同様に男性同士と女性同士

では異なる様相を呈する。ホモエロスやセクシャルな様相を呈しつつも、同性への魅力や憧憬、同一化、尊敬や敬意、目標等の根源となる欲望対象や心象を構成する。モデルとライバル関係ともでいべきか。ホモフォビアは同性愛嫌悪という心的な社会現象を意味する。男性同性愛には厳しい抑制として作用する。

さらに、ホモソーシャルなものは組織的な社会制度に埋め込まれており、男性同士の人間関係を規定する。

また、文化表象にも多様に表現されている。たとえば夏目漱石の作品はホモソーシャルな視点での解釈されてきた。さらに漫画の世界ではボーイズラブ(BL)全盛であるがこれも同じである。作者は女性で読み手も女性であり、描かれているのは男性同士の性である。しかし男性の読者もいて、腐女子に対して腐男子という言葉もあるくらいに大きな領域を成している。読み手のたち位置でBLの意味づけは異なる。

また男性性のもつ能動性を受動性へと置換させて男性性をひっくりかえそうとする作品もある。たとえばBLの『性の劇薬』という作品がある(水田ゆき、BL電子コミッ

ク・ボーイズファン、2019年。2020年に実写版として映画化された)。自殺をしようとしていた青年が助けた男性に生をあずける。助けた青年は、受動的な性の快楽を与えて生を回復させようとする。かたちは「調教」である。青年は性の快楽とともに生の喜びを得て、生き続ける方向へと導かれていく。BLの一方の男性は受身である。この点を強調して活かした作品である。ここでは男性同士の性を描くことで能動的な性としての男性の性を反転させている。こうしてみると腐男子だけではなく男性の性から発する描写は多様に広がり、いろいろな男性性を考える可能性を拓く。セクシュアリティにおける受働と能動の二分法は根強く男性のセクシュアリティを規定しているので男性性の多様性を表象しやすい。

この点について二村ヒトシは男性の受動的な性のかたちを開発し、それを強調している(『オトコのカラダはキモチいい』、二村ヒトシ他、角川文庫)。

2. 男性同士の関係性-他の男性を模倣することと構築される男性性

ホモソシアルをはじめとしたこうした諸観念は、男性は男性を意識していることをとりあげる。社会的地位、若さや容貌、体格や筋肉、職業や収入、所有物、パワー、性器の大小、モテ度合い等が比較対象になる。女性からの賞賛も視野に入るがそれは間接的。まずは同性のまなざしを通して男性性の骨組みが作られる。他の男性をとおして男らしい姿を想像する。自らの男性性の現実を多様な序列のなかに置いていく。

社会のなかの支配的な男性性形成をめざ

す競争ともいえるだろう。他の男性の現実には、単に競争対象としての排除や距離化だけではなく、羨望や憧憬等、同一化対象としても写るので、本来的には親密な関係性と近い関係性にある。しかしそこには序列や競争があるので距離ができるという両義性がある。同一化対象となると、そこにはエロ的な様相もでてくる。それがセクシュアルなものにならないように心的な調整が必要になる。そこにつながり方としてのホモソシアルなものという意味づけることできる関係性の観念が作られる。「つながりたいけどつながれない」という両義的な様相を呈する男性同士のつながり方となる。

この捻れた関係性を表現するものに攻撃性やその具象としての暴力がある。それはパワー感を支えている。男性性はアリーナのようにして、競争と葛藤、ライバル視、同一化と敵対等の背反的なものを同居させる場となり、それらが「メビウスの輪」のように捻れてつながる一続きのようなものとなる。たとえば少年漫画につきものの「友情と闘い」がそうである。また、ブラザーフッドという言葉にはこの距離化のなかに「敵対と友愛」が同居する。「よお、兄弟!」という言い方には暴力と友愛が同居している。

もちろん男性一般が一律にホモソシアルなものに染め上げられているわけではないが、主流となっているジェンダー秩序はホモソシアルなものを強調するように作用する。当然、男性も一様ではなくパーソナリティ的には十人十色であるが、しかし単に様々な男性が存在しているというのではなく、ジェンダー作用は社会的要素と結びつき、セグメント化され、序列化された男らしさの布置を構成する。その男らしさの意

識と態度の布置は社会秩序の構造のなかに置かれている。社会が保持する支配的な男らしさの人生脚本にホモソーシャルなものは強く影響をあたえる。

3. 思春期のエピソード

ーチャムシップとホモソーシャル

関係性を語る言葉は発達心理学や精神医学で使われている。たとえば「チャムシップ」という関係性を語る言葉がある。精神医学者のH.S.サリヴァンの概念である(『精神医学は対人関係論である』中井久夫他訳、1990年、みすず書房)。チャムシップ関係は、思春期にさしかかる前後に築かれる同性同年代の仲間関係を意味する。同性同士の思春期のつながり方である。親密さはまずは同性同士のつながりのなかから生成する。年齢的には、小学校中学年から高学年の児童期に相当する。とくに遊びを中心にした数人程度の仲間集団をつくり、時には閉鎖性が高いグループを意味する。この時期は「ギャング・エイジ」と呼ばれることもあり、自立を準備する。ホモソーシャルなもの原型ともいえる。

私が男性の暴力に関心をもつようになった背景には男としての育ちの過程で感じた男性性ジェンダー形成の過程を言葉にしたかったからでもある。とくに主流となっていく多数派の男性性の形成過程に少なからずの違和感をもっていたことが関係している。『対人援助学マガジン』第29号(2017年6月、第8巻第1号)の「臨床社会学の方法(17)踏みとどまる力」のなかで次のようなことを書いた。文脈は異なるがホモソーシャルなものへの気づきとなっている。そ

の一部を本号の文脈にあわせて引用しておこう。

「まさる君のことー記憶のなかのホモソーシャル

ははっきりと覚えています。小学生5年生の教室です。まさる君という同級生がいました。学級の係を決める日でした。どうしてもやりたい係があり、私はそれに固執していました。担任はじゃんけんではなく話し合いで決めることをすすめていました。まさる君と私とその係をやりたくて最後までなかなか決まりませんでした。とつぜん、背も高く、運動神経もよく、快活なまさる君が「ただし君がやったらいいよ。似合う係だと思うよ。」といったのです。その瞬間、「すごい奴だ!」と思ったのです。我にこだわる自分を恥じました。潔くて格好いいなと思ったのです。11歳の少年の心に刻み込まれたその時の情景は、長じてリーダーシップ、他者への配慮、友愛(フレンドシップ)、男らしさという難しい言葉を考える時の、現実感としていまでも鮮明に残っています。」と記した。

思春期の同性同士の関係はチャムシップとされるが、それに関わるエピソードとして鮮明に記憶に残っている。これはホモソーシャルなものとして私のジェンダー意識に沈殿している。同じようにして学童期から思春期はこうしたエピソードに満ちている。少年たちのサブカルチャーも同じような内容になっていた。

同性同士の関係と異性との距離化はさらに同時に進行し、思春期や青年期前期のジェンダーアイデンティティ構成のギクシャクした様子を覚えている。特に、どうしても同性他者との親密な関係性の作り方や関与の仕方(コミットメント)の困難さを感じていたことが記憶にある。

脱暴力を焦点にした男性同士のグループワークにはホモソーシャルなものが表出され

る。関係の力学的なものがみえてくること
がある。男性のグループワークをするとそ
こには育ちの過程で身につけた男性性の意
識と態度が提示される。

矯正施設で性犯罪者の再犯防止プログラ
ムに関係していたことがあるが、そこには
刑務所内部でのグループワークという強い
枠があり、グループワークをしていてもマ
ウンティングをはじめとした男性的行動様
式は抑制されていた。しかしDVや虐待な
どは社会のなかで行うグループワークにそ
うした枠はない。だから自然なかたちで男
たちの関係性の生態がカウンセリングやグ
ループワークをとおして再現されることにな
る。

4. ウィークネス・フォビア (弱いとみられ ることを恐れる心象

脱暴力についての男性のグループワーク
には男らしさと暴力を意味づける意識と行
動のエコロジカルな様相が具体的に表出さ
れる。子ども虐待親向けの大阪で開催して
いる「男親塾」は任意参加であり、児童相談
所の主催でもない「中途半端」な立ち位置
なのでよけいにそうしたことがみえてくる。
男性たちからすると児童相談所は子どもを
保護した「敵」であり、対決すべき権力装置
である。しかしいくら闘っていても無駄で
あることは時間とともに理解する。その外
部に位置づく民間の任意参加の「男親塾」
はいったいどちらの見方なのかという駆け
引きが行われる。そこでいったいどのよう
に振る舞えばいいのかという逡巡のなかに
揺れ動く心理がみえてくる。できれば脱暴
力にむけて家族としてやり直したいという

思いはあるが男らしさの意識と態度は習慣
として内面化されているのでその思いを阻
害する。

そうした性格の男親塾というグループワ
ークで示す男性たちのなかにホモソシアル
なものものが染みついている様子がみえて
くる。とくに加害のナラティブからみえて
くることを整理しておきたい。その中心に
は、男らしさの構築には「男らしくないも
の」が不可欠となり、それは端的に「ウィー
クネス・フォビア (弱いとみられることを
恐れる心象)」であることが読み取れる。こ
れは戦争と男性性の研究で指摘されてきた
ことだ(内田雅克『大日本帝国の「少年」と
「男性性」—少年少女雑誌に見る「ウィー
クネス・フォビア』、2010年、明石書店)。

男らしさの形成に暴力は手がかりを与え
る。暴力を魅力だと感じる男たちがいる。
暴力は手っ取り早くパワーを感受できるか
らである。攻撃性や競争性あるいはリスク
テイキングと言い換えると男性性は暴力を
招きやすいことがわかるだろう。

さらに儀礼的暴力という言い方もされる。
特に男の子の育ちには通過儀礼としてのリ
スクテイキング行為が説かれる。成長に艱
難辛苦はつきもので、それは有益だと先の
父親や教師たちは考えている。確かにこう
した筋立てはマンガやゲームに多く登場す
る。セックスも同じように用いられる。バ
イオレンス、セックス、パワー、リスクテイ
クは男性がその社会で主流となった男性性
を身につけて生きやすくなると考えられて
いる。つまり男らしさの行動特性となっ
ている。

こうしたことは加害者臨床の場面におい
てさらに垣間見えてくる。加害の語りは難

しい。言葉がでてこないからだ。それでも表現される脱暴力のグループワークの語りたら、男性たちの認知の図を考察してみよう。

5. 男性同士が意識しあうことと脱暴力

こうしたグループワーク暴力を行使してきた男性たちが語る。「脱暴力は『脱力』に近いのでやりにくい。なんだか腑抜けになっていくようだ」と語る30代の男性はDVでグループワークに来た。暴力をとおして妻に君臨していた男性はその違法性を指摘されたことの失意とともにこうしたグループワークにまで参加させられ、暴力を取り除くことのもつ意味をうまく構築できずにグループワークに参加していた。いかつく振る舞うこと、他人をコントロールすること、威嚇することをバネに生きてきた彼の人生の課題に、はじめて妻から脱暴力を指示され、心の準備ができないままにグループワークに参加した。そうした彼の男性性の生態学的行動特性は、長い間の習慣となった男性の身体的なふるまいなのでついていられない。三回程、グループワークに参加したがその後は来なくなった。彼はこう語りながらグループワークのあとはいつもスポーツジムに通っていた。

「そんなに誉められるような、柔な、簡単な男ではないので軽々しく誉めないでほしい。先生はそもそも俺をほめるに値する男性なのか。どんな苦勞をしてきたのか。」と語る40代後半の虐待父親は、職人さんだった。虚勢を張ることでなんとか力の衰弱に抵抗しようとしている様子が垣間見えた。

刑務所で取り組んでいた性犯罪再犯防止グループワークでも同じようなことを語る男性がいた。「こんなプログラムは意味があるのか。プログラムでそう簡単に変わることができるのか。」と抵抗していた。プログラムによって動かされまいとする男性の「主体性」がこうしたかたちで発揮されていた。なぜなら刑務所は主体性を剥奪する施設なので、僅かではあれグループワークという教育的処遇の場はプログラムに関与したり抵抗したりする能動性が発揮できる場と機会だからである。再犯防止の教育プログラムがあるからといってその成否が刑期を短くするわけではない。グループワークで主体性を発揮しようとするところこうした言い方になり、プログラムそれ事態に抵抗する。男性性ジェンダーと動機形成の課題である。組織としての児童相談所は抵抗しやすいので反抗は常であるが、こうした取り組みで自らの意思と責任でグループワークへの意味づけや意義を構築していくことが大切となる。

「グループワークでやるアサーシオンのコミュニケーションの練習は嫌いだ。男には克己のためにネガティブな課題だしの方がいい。」と話す40代前半の男性。

また別の加害の男性のナラティブはこうだ。「喧嘩をして殴り合うほどに情が深まる。競争も同じ。」だという。「悪いことをして体罰を加えられて育ったことが役に立つ。」とも語る。

こうしたことを多くの男たちが真顔で語り、彼らの家庭内暴力を正当化する意識として作用している。対話をとおして理解した男性の暴力を肯定している世界の意味付

けを「暴力神話」とくくり、暴力を肯定する男性の意識をまとめた(末尾に掲げた表1)。

これは現代日本社会で主流となっている支配的なイメージの男性性が宿す「暴力神話」である。脱暴力への取り組みは、まずはこの「暴力神話」の乗り越えをめざす。男らしさ意識はマインドコントロールのように男たちをとらえている。本連載では一貫した論調であるが、男性性ジェンダーが深く関係している。男親塾などの脱暴力グループワークでは、最低限、暴力に結びつかない男性性の再構成をめざすことが有益だと考えている。暴力と結びつく男性性の意識と行動の解毒の取り組みである。そのことの上に、DVや虐待への加害者プログラムを組み立てることを試みていく。

さらに、ホモソーシャルなものに染められた男性同士の関係では、他方の、脆弱さをかかえる男性は被害ポジションとなる。男性の性被害である。特に青少年男子たちの被害が声に出せないというサイレンシングを考慮すると潜在的には多いと考えられる。男性と男性のあいだの暴力がもたらす被害であり、これもジェンダー暴力といえる。これをどう位置づけるのかが男性性研究において問われている。

6. 暴力のその前にあること

筆者のグループは自治体と協力して男性相談にも取り組んでいる。相談の多くは暴力加害問題である。暴力を振るう男性は、確かに自らの暴力をなんとかしたいと考えているが、被害者にも非があるとも考えており、喧嘩両成敗的なことを期待して相談にやってくる。

その意識には社会が体罰を否定していないことが反映されている。また、相談に合うように妻に指摘され、紹介されることも多い。いやいやしぶしぶだけでも相談に足を運ぶのでまだ変化を期待できる男性たちである。だから動機はおしなべて低い一般的な男性からすると男性性を暴力から切り離そうとする意志はある。実態を聞きたくて被害にあっている女性や妻から話を聞くようにしている。

被害の立場の妻に話をきいていると、同じ関係性を生きているとは思えないような異なりがある。それをただちには暴力と言えないが、すれ違うエピソードが多い。夫婦喧嘩で終わるようなすれ違いではないことがある。ものを投げつけた、殴ったことがある等の「事実としての暴力」行為の認識はそんなに違いがなく、「やりすぎた」という反省とともに暴力行為を認めることが多く、それは来談して語りやすい。

しかしそうではないエピソードが語られる。たとえば、「いのちに対する感受性の違いがあるようだ」とDVで相談にきた夫の妻は語っていた。できちゃった婚となる夫婦、妊娠したと嬉しくなって話をしたら「墮胎できるのいつまで？」と聞いてきたという。車でネコを轢いてしまったけど放置した彼氏に恐ろしさを感じたという恋人。育児ストレスで「子どもを殴ってしまうかも知れない」と話した翌日普通に仕事に行ったことに寒気がした若い妻。ベッドで大事な夫婦の話をしているちょっと離れたらその間に携帯でゲームしていた彼への不信が大きくなったことも忘れられないと語る。暴力ではないが関係性を維持することの不安をもつ女性たちがほとんどである。

パワーとコントロール行動は関係性のなかで日常的におこる。筆者の加害者臨床体験から引用してみる。

○「自分のものを買うときにいつもいっしょに付いてくる。『僕の好みの女性になってほしい』と言う。自分が自分でなくなっていく感じがする」。

○「交通の便の良くないところに住んでいるので本当は免許が欲しい。必要なのに、免許を取らせてくれない。『運転が下手だから』って言う。だからいつも彼の車で行動することになる」。

○『『習い事をしている』と言うと、『それは男性から教わるのか』って聞いてくる、

○『『同窓会に行く』と言うと嫌な顔をする」。

○「DVを受けているのに彼といる方が安全だと思えるような意識になったことがある。実家に逃げていると追いかけてきたり、メールが頻繁に入ったりするので結局一緒にいることで落ち着くから」

○『『今日は何をしていたのか』といつも聞いてくる」

○『『死んでやる』と言われると別れられない。元の関係に戻ることが多い」

また、こんなコントロールもある。

○「授業の前に携帯メールがあった。『俺の持っている講義が休講になったのでこれから会いたい』と。彼女はこれから講義がある。そうしないと愛情が薄いと非難されると思うと怖い」。

これらはすべてが直ちに暴力やハラスメントだというわけではないが、境界域にあるコミュニケーション的、行動的な特性を有している。総称すれば「関係コントロール型のコミュニケーション」(Stark, Evan.(2007) Coercive Control: How Men

Entrap Women in Personal Life, Oxford University Press, 2007)である。パワーハラスメントはこの様相を呈する。「関係性の濫用」である。しかし当人は愛の日常と考えている。

グループワークで観察していると、その暴力の出来事は、単発的に起こるのではなく、習慣となっている様子がよくわかる。確かに明確なDVではない。共通して、他者への配慮の欠落がある。

その上で思うことは、私もまた男であることを思わせられることである。男たちのナラティブを聞いていると、残念ながら理解できてしまう男性としての自分(=筆者)がいる。同じ意識をもっているわけではないが、男性の育ちのなかでは共通に体験していることがあるからだ。生育過程における、とくに学童期や思春期の育ちにおける共通体験である。ホモソシアルな出来事とおして友情が育まれていくので、主流となっている男性性から逃れることは難儀なことだといえる。

7. 水平的なホモソシアルはいかにしてありうるのか

男同士が、例えば、感情的な親密さ、親しみやすさ、そして利益にならない友情を発達させるためには競争や排除となるようなホモフォビアを削除しつつ交歓ができればいいのだろう。それを仮に水平的なホモソシアルなものとしておこう。女性や子どもへの男性の脱暴力を考える際にまずは同性同士の関係においてつくられる両義的な親密な関係性の再考を迫る必要がある。学童期や思春期からのジェンダー構成に根ざし

た脱暴力教育の課題という意味でもある。この視点を保持すべきなことは、ホモソシアルなものにはさらにもうひとつ「ミソジニー(女性嫌悪や排除)」と結びつくことも多いのでこれへの注意が要るからだ。つまり、ホモソシアルなものものあり方である。支配的な男らしさに関する多くの議論が示しているように、それは必ずしも家父長制の強化ではないこともある。ブラザーフッドが垂直的なホモソシアルなものに転化していかないように「ブロマンス」(男性同士の友愛)という言葉もある。ホモエロスを肯定した男性同士の関係である。

男性同士の関係に着目する脱暴力論は、男性のホモソシアル関係の伝統的な理解とは異なる視点の形成が必要となる。競合や階層に焦点を当てたいくつかの男らしさの理論に見られる男らしさの構成とは異なるホモエロスのものを強調するという意味である。

ジェンダーの研究では、コネルの「ヘゲモニック(覇権的な)男性性」の概念がよく引用されるが、その動的な性質を強調する理論モデルを開発することが重要である。さまざまな男性的立場を調査し、ヘゲモニック(覇権的な)男性性とは異なる側面をもつ男性の諸相を注意深く調査することにより、日常生活におけるさまざまな力のパターン(たとえば、反暴力への共感、育児や家事への関与程度、フェミニストの動きや代替男性性への意欲等)、あるいはLGBTQへの関心や当事者であることの可能性を識別することができる。同時に、社会における男性の特権と権力の地位を守るのに苦勞している保守的な男らしさの最新のバージョンを見いだすことも重要である。

たとえば、先に紹介したブロマンスという言葉。腐男子もそうかもしれない。ホモフォビアとの距離によって定義される男性の友情は緩められ、親密な友情関係をもたらすという考えは、受け入れられつつあるのだろう。しかしまだまだヘゲモニックな(覇権的)男らしさの枠組みは根強い。「覇権を超えた」ことはなく、「家父長制を超えた」ことをいかにして構想していくのかの議論をすべきだろう。そのためにはヘゲモニックで支配的な男性性の再定式化が望ましい。明らかに、覇権的な男らしさは常に女性らしさに反対し、特権があると定義されているというコネルの概念を破る必要がある。

また、適切なリーダーシップに重なるイメージをジェンダー論が開発すべきだろう。そして、これはおそらく男性のパフォーマンスと友情が親密さ、愛、そして愛情と関連しているときに起こる。しかし、男性との親密さや感情的な近さを明確に表現することは、男らしさを完全に混乱させることはないかもしれないが、女性らしさに関して先験的で必ずしも特権ではない男らしさを再構成する可能性がある。それが男性にとっての親密な関係性における脱暴力の課題となるべきだ(ここで紹介した水平的なホモソシアルと垂直的なホモソシアルなものの論は次の文献からアイデアを得た。Homosociality: In Between Power and Intimacy, Nils Hammarén¹ and Thomas Johansson, *SAGE Open*, January-March 2014: 1-11)。

8. 多様な男性性へ

-ホモソシアルなもののカタチ

さらに、ホモソシアルなもの垂直的实践と水平的实践を区別することにより、ホモソシアルなものに関するより動的な見方を展開することができる。ホモソシアルなものについて垂直/水平の見解をとることは、構造主義のヘゲモニックなジェンダー秩序との関係、つまり、同程度の社会的関係が「伝統的な」覇権的な男性と女性の社会的地位をどの程度維持し維持するかを強調する。ヘゲモニーの読解は、ヘゲモニーの潜在的な再調整を、ジェンダー平等とより公正な社会のための闘争の一部として解釈することを可能にする。おそらく、プロマンスと水平的なホモソシアルなもの開

発と概念化は、変化と移行を指し、その結果、親密性、性別、権力関係の最終的な変化への傾向を含む覇権の再構成を指す。しかし、ヘゲモニーの潜在のおよび部分的な再定義だけでなく、男性性の多様性や他の社会的属性との結びつきを強調する「交差アプローチ intersectional approach」をとることにより、ジェンダーの秩序をより徹底的に分析する必要がある。これはマジョリティとしての男性をより豊かなものへと「解体」してく方略ともなる。ホモソシアルなもの等の一連の観念をとおして男性同士の関係性を問い直すこととしていきたい。

表1 暴力神話-グループワークで語られた男性たちの暴力を肯定する意識の整理

暴力は愛のむちである。	暴力は相手が引きおこさせる。
暴力は問題解決になる。	暴力に耐えてこそ人は強くなる。
暴力は正しい。	暴力を振るわれるには理由がある。
暴力をとおして痛みがわかる。	暴力は人を鍛える。
暴力を振るうほどに関係が密である。	暴力は絆を強くする。

2020年3月3日受理

中村正

(臨床社会学・社会病理学・社会臨床論)